

## 湖南こんなとこなんじょ 鳳凰古城とミャオ族について

文：張 楠、福見 尚美

写真：福見 尚美、木村 純子

湖南省は自然に恵まれ美しい風景がたくさんあるばかりでなく、歴史も古くて名所旧跡もとても多いところでは、多民族が暮らす地域であるため、多種多様な風俗習慣が昔から伝わっています。第2号では、山水画のような奇岩絶景を有し、世界中から注目を浴びている「張家界武陵源」をご紹介させていただきましたが、今回は、中国で最も美しい町並みと言われる少数民族の町、鳳凰古城とそこに定住しているミャオ族の風俗習慣についてご紹介したいと思います。

### 一、鳳凰古城



(鳳凰古城の全景 撮影：木村 純子)

鳳凰古城(ほうおうこじょう)は湖南省湘西土家族(以下はトゥチャ族)苗族(以下はミャオ族)自治州の南西部に位置する、ミャオ族とトゥチャ族を主とする少数民族の集住地です。中国国家歴史文化名城であり、国家AAAAレベルの景勝地<sup>①</sup>で、中国十大古城や湖南十大文化遺産の一つでもあります。鳳凰古城は1704年(清の康熙43年)に作られた町で、300年もの歳月を経てはいますが、昔ながらのたたずまいが今なお残っています。清の時代に建てられた東門と北門の古い城楼が現存し、また、町なかの青石の石畳の通りや川沿いの木造の吊脚楼<sup>②</sup>、そして朝陽宮、天王廟、大成殿、万寿宮など、鳳凰の人たちの知恵と

<sup>①</sup> 中国の景勝地ランキング付け基準では、五つのレベルに分かれている。最高からはAAAAA、AAAA、AAA、AA、Aレベルである。

<sup>②</sup> 吊脚楼は「吊楼」とも呼ばれており、ミャオ族、チワン族、トゥチャ族など少数民族の伝統的な住宅様式である。

心血が凝縮された建物が点在しています。



(古城のシンボルである鳳凰 撮影：福見 尚美)

鳳凰という地名の由来は、天方国<sup>①</sup>の神鳥フェニックスが、500歳になるたび香木を集めて自ら焼け死に、その後再び灰の中から蘇るという伝説にあります。フェニックスとは、中国神話にある鳥の王「鳳凰」のことでもあります。鳳凰古城は古くは「鎮竿」と呼ばれていましたが、町の南西部にある、翼を広げた鳳凰の形に似た山にちなみ、「鳳凰」と呼ばれるようになりました。

鳳凰古城は歴史が古くて景観が素晴らしく、名勝旧跡がたくさんあります。町には、赤紫色の砂岩で築かれた城楼、沱江沿いに建てられた吊脚楼、明清の時代の古式ゆかしい庭園や静かに流れる沱江があり、周辺には、「南華山国家森林公园」、地下の芸術宮殿とも言える「奇梁洞」、唐の時代に建てられた「黄絲橋古城」や世の注目を浴びた「南方苗疆長城」などがあります。ここは景観が素晴らしく、少数民族の風情と情緒が漂っていて、文人墨客や有名人も輩出しています。鳳凰古城は雲南省の麗江古城、山西省の平遥古城と肩を並べて、「北の平遥、南の鳳凰」として知られています。新旧二つの地区に分かれている鳳凰古城は山に囲まれていて、町の中を澄んだ沱江が流れています。また、赤紫色の砂岩の城楼が岸辺に佇み、南華山が古い城楼を引き立たせ、さび付いた鉄の扉が黙々と歴史を守り続けています。

<sup>①</sup> 古代中国のアラビア国家に対する呼び方。

## 二、古城の名勝旧跡

### 1、北門の古い城楼



(北門の古い城楼 撮影：福見 尚美)

北門の古い城楼は明の時代に築かれました。鳳凰古城の北に位置するため、「北門城楼」と呼ばれていますが、本来の名前は「<sup>へつゑき</sup>壁輝」です。鳳凰は元と明の時代に「<sup>ごさいちやうかんし</sup>五寨長官司治所<sup>①</sup>」が置かれ、土の城壁がありましたが、明の嘉靖年間に鎮竿参将<sup>かんしやう</sup>が麻陽からここに移り駐在して国境を守ることになりました。そのため、土の城壁は石レンガの城壁に改築されて四つの門が設けられ、門の上に城楼が建てられました。清の時代になると、ここに「鳳凰庁<sup>②</sup>」や「<sup>ジェンチエンげんえいせい</sup>鎮竿鎮辰沅永靖兵備道<sup>③</sup>治所」が相次ぎ設立されて、1715年（康熙54年）に石レンガの城壁が石の城壁に改築され、北門も「壁輝門」という名前で定着し今日まで残っています。北門城楼は鳳凰の地元の赤紫色の砂岩で築かれていて、設計者と職人たちの工夫が凝らされています。城門は半月形で、それぞれ二枚の大きなブリキに覆われ、たくさんの大きな丸鉄釘で固定されています。城楼は青石で築き上げられていて、屋根は入母屋造りの穿闘式木造<sup>④</sup>建築で、石造りの曲面天井になっています。城楼の壁には二段の鉄砲狭間が開けられ、それぞれに四つの銃眼があり、城外の左右180度の範囲を把握し守ることができます。北門の前を流れている川にかかった木橋は石の土台に支えられており、昔は町を出入り

① 五寨長官司という地方首長が政務を行う場所。湖南省旧永順府にある。

② 清の時代、民政を司った行政機構の一つ。当時の湖南布政使司に属した。

③ 兵備道とは、省の下で軍事などを巡察監督する高官である。

④ ミャオ族の民家構造の一種で、水平材に太い梁を使わず、板状の貫を通して柱同士を繋いでいるのが特徴。

する唯一の通路でした。この木橋は細くて、橋の上で人とすれ違う時は、お互い体を横向きにしなければ進むことができません。

## 2、沱江吊脚楼



(沱江吊脚楼 撮影：福見 尚美)

吊脚楼建築群は古城南東部の回龍閣かいりゅうかくにあり、表は昔の古い大通りに面し、裏は沱江の上に掛かっている、鳳凰古城のミャオ族の建築様式の特徴が色濃く残る古い建築群の一つです。この吊脚楼建築群は全長 240 メートルで、清から中華民国初期にかけての建物ですが、今でも十数世帯がそこに住んでいます。吊脚楼は斜面に建てられており、その基礎は削られて「厂」の形の土台になっていて、土台のない部分は長い木の柱が下から支えています。そして、土台の高さまで角材や横梁かくざい よこぎが組み上げられ、土台面と水平になるようにしています。そして、横梁の上に床板を張り、家の広間を作ります。その下は豚小屋や牛小屋、または物置小屋として使われることが多いです。広間の上には、また大小の梁や角材を用いて母屋とつながっていて、母屋の一部となっています。また、土台の上にある母屋は二階建てで、一階は生活空間、二階は物置です。屋根は瓦ぶき（或いはスギの皮）で、壁は木かレンガ、または石でできています。

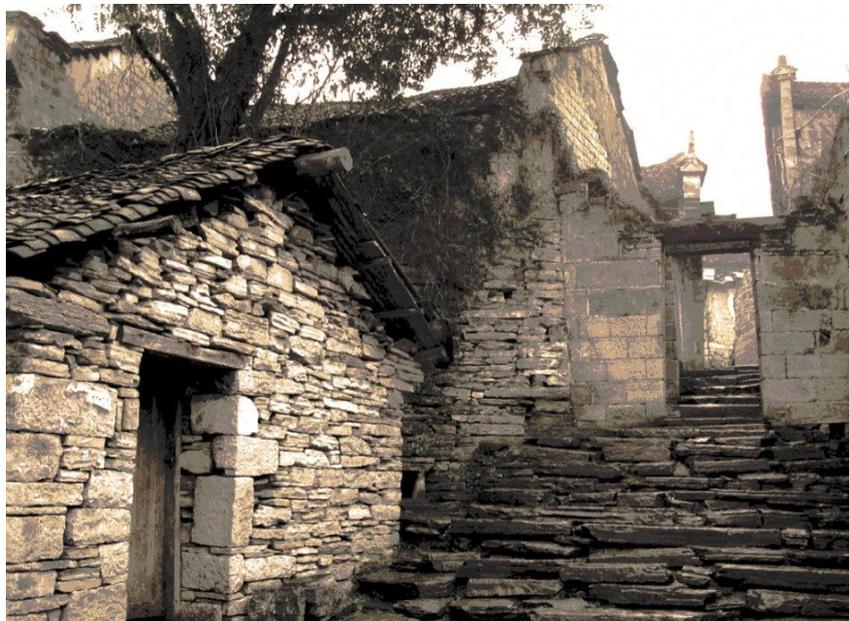
### 3、青石の石畳の通り



(青石の石畳の通り<sup>①</sup>)

鳳凰古城には「東正街」という幅3メートルの青石の石畳の通りがあります。全長3キロ余りで、道門口から東へ、十字街、回龍閣、營哨沖、陡山唎、接管亭、沈從文の墓を通り、天下第一泉まで延々と伸びており、鳳凰古城きっての賑やかな商店街となっています。通りは元から明の時代に作られたのですが、現存しているのは清の時代の構造と様式のもので、鳳凰古城の主軸として無数の横町や路地と交差し、町の交通網を築いています。

### 4、書家堂古堡



(書家堂古堡<sup>②</sup>)

<sup>①</sup> 出所：mp.weixin.qq.com

<sup>②</sup> 出所：http://s13.sinaimg.cn/large/514ffa4b449376810806c&000

書家堂は「舒家塘」とも呼ばれ、黄合郷の東にあります。ここは湖南、貴州、四川省の省境であるため、昔は盗賊が横行していました。書家堂はその見張りや駐屯兵による攻撃などの役目を果たしていました。考証によると、北宋時代、楊家将の後裔楊再思は、南方を平定しろという皇帝の勅命を受け出兵した際に、険しい地形のこの地で陣を取っていたそうです。それで、書家堂は軍事の要衝となり駐屯が始まりました。そして南方が平定された後、この地が当時の政治と文化の中心地となりました。長城学専門家である羅哲文教授は2000年5月にこの地で調査を行い、現存する城壁の跡を研究した結果、この古堡は少なくとも800年もの歴史があるという結論を出しました。明の万暦年間（1573年～1620年）には、南方のミャオ族の民衆が一揆を起こしましたが、政府はそれを鎮圧するために、多額の資金を投じて、4年間にわたって書家堂と周辺の古い兵舎の補強工事を行いました。

## 5、沱江の夜景



（虹橋 撮影：福見 尚美）

沱江は鳳凰古城の人々にとって、生活や文化、産業をはぐくむ「母なる川」です。沱江の兩岸を繋いでいる虹橋には屋根があり二階建ての住居のようにも見え、鳳凰古城のシンボルとなっています。川沿いに建てられた吊脚楼は民宿だけでなく、食べ物屋さんやお土産物屋さんとなっていて、観光客などたくさんの方が行き交うに賑やかな場所となっています。お土産物屋さんには民族工芸品や地元ならではの土産物が並び、民族文化の魅力を十分堪能することができます。



(沱江の夜景 撮影：木村 純子)

夜になり、静かに流れる沱江がライトアップされると、昼とは全く違った幻想的な光景が見られます。兩岸では、次々と灯が煌めき出し、漁民の歌も聞こえてきます。沱江の夜景は優雅で感傷的です。吊脚楼に飾られた赤提灯が優しく辺りを照らし、沱江の流れの音が子守歌のように人々を眠りに誘います。また、北門の外には沱江舟遊びの乗り場がありますが、そこは地元の人が灯籠流しを楽しむ場所でもあります。この灯籠流しは旧暦7月15日の鬼節<sup>①</sup>だけでなく、祈願や祝福をしたい時にはいつでも流すことができます。波間を漂う灯籠の光りは、見え隠れしつつ神秘的な美しさを漂わせ、人々を魅了します。

---

<sup>①</sup> 中元節。中国の「お盆」の呼び方の一種。春の清明節と同じく、先祖を祀る重要な日である。

### 三、ミャオ族の民俗



(鳳凰地元のミャオ族 撮影：木村 純子)

ミャオ族は鳳凰県の最も古い民族です。ミャオ族には独自の言語があり、湘西（湖南省西部）、黔東（貴州省東部）、川黔滇（四川、貴州と雲南省の省境）といった地域の方言に分かれています。ミャオ族の主な産業は農業ですが、狩猟も行われています。また、挑花（刺繡のクロスステッチ）、刺繡、ダマスク織、ロウケツ染め、切り絵細工、銀飾りなどはミャオ族の手工芸や芸術品として異彩を放ち、国内外に名を馳せています。中でもロウケツ染めは千年以上もの歴史があります。ミャオ族の民族衣装は130種類以上あり、世界のどの民族衣装にも引けを取りません。



(ミャオ族の刺繡とダマスク織 撮影：木村 純子)

## 1、ミャオ族の銀飾り



(ミャオ族の銀飾り<sup>①</sup>)

ミャオ族は手工芸に優れており、特に銀細工を誇りとしています。ミャオ族の銀飾りの種類は様々で、たとえば、頭飾り、首飾り、胸飾り、腕飾り、盛装飾りや子供用帽子飾りなど、また、地域によっては足飾りもと、頭から足まで細かく分かれています。ミャオ族の銀細工はすでに千年以上もの歴史があるとされており、腕のいい銀細工職人が心を込めて作っています。素晴らしいデザインと洗練された技術によりできあがった多種多様な銀細工は、輝かしい芸術の世界だけでなく、奥深い精神の世界をも表しています。常に同じ所に留まらず、長年各地をさすらってきたミャオ族はすべての財産を身につけることを好み、人の移動とともに財産を移動させてきました。昔の銀貨を飾りに使うのは、その財産の価値を保ち、携帯しやすくするためでもあります。これがミャオ族の人々が銀細工に夢中になった理由かもしれません。

---

<sup>①</sup> 出所：www.v6ys.cn

## 2、民族舞踊

ミャオ族の人は歌にも踊りにも優れています。歌は情歌（ラブソング）と酒の歌（宴会で歌う歌）が特に有名です。ミャオ族の「飛歌<sup>①</sup>」は高くよく響く声で歌われ、とても表現力に富んでいます。伝統の踊りは「芦笙舞<sup>②</sup>」、「板凳舞<sup>③</sup>」、「鼓舞」などがありますが、最も特色のあるのは「芦笙舞」と「鼓舞」です。



（芦笙舞<sup>③</sup>）

「芦笙舞」は旧暦の1月（お正月）15日、3月3日<sup>④</sup>、9月9日（重陽の節句）などの祝日や、家の新築、豊作、婚礼などを祝うために踊るものです。一般的な「芦笙舞」はだいたい2～5名の男性が芦笙を吹きながら踊りをリードし、ほかの人が輪を作ってリズムに合わせて踊ります。踊りの現場は壮観で熱気に溢れています。競技の「芦笙舞」では、祝日や集会の日には少人数の踊りの上手な男女と一緒に踊ります。人数は2～4名で、しゃがみ込み、屈身、起き上がり、逆立ちなど難しい振りもつけられていて、とても人気があります。男性は力強く、女性はしなやかで美しいです。飾られた銀飾りも踊りに合わせてリズムよく音を奏でます。「芦笙舞」の動作の特徴から見ると、「踏む」と「跳ねる」の二種類に分かれます。「踏む」の特徴はリズムに合わせて、両膝を軽く屈めて片足を前に出しながら進むことで、「跳ねる」の特徴は体を支える側の足が地面に着くと、すぐにもう片方の足を前に蹴り上げながら上半身もそれに合わせて自然に揺らすことです。「踏む」は上品で優雅な動作なのに対して、「跳ねる」はしなやかで軽快な動作です。

① 遠方からの客をもてなす時に歌う歌。

② ミャオ族の集団舞踊。踊り子はミャオ族の晴れ着を着た女性で、両手に小さな木製腰掛けを持ち、叩きながら踊る。

③ 出所：<http://www.qdn.gov.cn/xwzx/qdnyw/201704/W020170406370349051255.jpg>

④ 古来中国では、この日を上巳節と呼び、禊をして、身体を清め、邪気を払う日とされてきた。現在、ミャオ族では祝日としている。



(花鼓舞<sup>①</sup>)

「鼓舞」といえば「花鼓舞」です。「花鼓舞」は、湖南省鳳凰県、保靖県、花垣県などのミャオ族が「六月六<sup>②</sup>」、「八月八<sup>③</sup>」、「趕秋<sup>④</sup>」などの伝統的な祭りで必ず踊る民族舞踊です。祭り会場の真ん中に三人で叩く大きな太鼓が設置され、二人が両手にバチを持って皮の部分叩き、一人が片手にバチを持って縁を叩きます。踊り子は人数や男女の制限はありません。踊る前に、太鼓奏者がミャオ族の言葉で太鼓の発明者の功績を称えて先祖供養を行います。そして、三人の奏者はクルクル回転したり宙返りしたり、ジャンプしたりするパフォーマンスを披露しながら、調和のとれた太鼓の音を轟かせます。そして、踊り子たちはリズムに合わせて軽やかに輪踊りを始めます。基本の振り付けは日常生活の動きから派生したものが多くありますが、武術の要素も加わっているので、踊りはしなやかで力強く見えます。

以上が今回「湖南こんなとこなんじょ」の内容です。中国で最も美しい古い町「鳳凰古城」と親切でおもてなし好きのミャオ族が皆さんをお待ちしています。湖南省での観光、グルメ、レジャーなどを思う存分にお楽しみください！

最後までお読みいただきありがとうございました。次回も湖南省のさらに面白くて新しい情報を詳しくご紹介しますので、ぜひご覧になってください。

① 出所：<http://pic.people.com.cn/GB/31655/10345464.html>

② 1647年旧暦の6月6日に民衆一揆をリードした二人の英雄を祀るミャオ族の伝統的な祝日である。競馬、闘牛、ミャオ族の民謡や民族舞踊など様々なイベントが行われる。

③ 毎年旧暦の8月8日に行われるミャオ族の伝統的な祝日である。この日、ミャオ族の人は自家で収穫した穀物、鶏、鴨やトウモロコシで作ったおこしなどを持って一堂に集まり、全寨の人々と共に豊作を祝ったり家内安全を祈ったりする。

④ ミャオ族の伝統的な祭りの一つで、立秋の日に行われる。地元の人々は祭りの会場に集まり、ブランコをこいだり、獅子舞、竜灯踊りや刃の梯子登りを楽しんだりする。